

1、東日本大震災被害者へのミャンマーからの夏衣類寄贈
第3報 --- まとめ、制作から配布まで

ミャンマーの知人だから出来る事

ミャンマーでも大変心配して、何か出来る支援をしたい。との申し出があり自分達の手作りで特別な服を支援しようとなりました。

本物の国際交流めざして

日本からの一方的な国際交流でなくて困った時、お互いを支える関係が本物の国際交流と考えています

2010年から、ミャンマー・マンダレー市で縫製教育支援を目的にして、縫製学校の立ち上げて動いていました。先方には①有機栽培コットン素材 ②草木染 ③手織 ④日本支援の特別なデザイン ⑤手縫いの5つの要素が有りました。今年度の縫製教育講師養成中級講座の中で全員で製作しました



特別な衣類を制作



ミャンマーの皆さん

有機栽培Cotton
草木染
手織
特製デザイン
手縫い



縫製風景

NGOミャンマー支援会は2011年5月のミャンマー交流工芸展(財)北方文化博物館様のご後援頂き、ここの利益の一部によって上記衣類の日本への搬送などを受け持ちました。



展示会

被害者の方への配布は、日頃、直接被害者の方々を支援されている福島県連合婦人会様よりこの特別な衣類のストーリーをご理解いただき、被災者の体型や好みの色などに合せて配布ご協力いただきました。おかげでお届けした被災者の方より「着心地の良い服」との好評を頂いています。



福島県連合婦人会様会議



配布風景



配布後試着

2、ミャンマーの講習会での感じたこと

去る6月17日、財)対日貿易促進協議会(mipro)の依頼で、東京渋谷、シャンシャインシティ内にあるワールド・インポート・マートビル内のmipro会議室にて、「途上国商品輸入ビジネス支援セミナー」で講演してきました。

開発輸入をめざす40名の若い方々が来られて、熱心に聴講されてましたが、何か違和感を感じました。実は聴衆の中で「ビルマ」を知っていたのが1名だけでした。

これではミャンマーを対象にビジネスしようとしても残念ながら、先方に相手にされません。いつの間にか、甘い日本になったと感じました。



3、カンボジアでの一村一品運動について

カンボジアの事情として、復興期に多くの海外支援機関、プログラムが入り、支援を受け感謝されています。しかし、内部での問題意識として①支援慣れになって自分達の行動力が弱い ②自立出来る大規模事業が支援主体ではなかなか出来ない ③国発展のために自立が必要と感じているとの事。

そこで、カンボジアで活動している日本人NPO責任者S氏とカンボジア政府スタッフA氏よりミャンマーで農業支援をしているT氏と一村一品運動支援の齋藤へ協力依頼が来ました。

先月から試験的に現地にて試験耕作、調査を開始していますが、順調に推移しています。先方の関係者の自分達で出来る事を実行しようとする高いモチベーションによる事が大きいようです。私が本格的に現地入りするのは今秋からになります。すでに2度現地入りしているT氏と昨日打ち合わせしてきました。

秋からの現地の動きが楽しみです。

4、ミャンマーでのNGO meeting

左の写真は、今年3月ヤンゴン市内で開催された、NGOセミナーの風景です。実はミャンマー国内ではNGO活動は制約が多くて容易では有りません。しかし、3年前のサイクロン被害救援活動のころから、NGO活動が目立ってきていました。

今回は外国人は2-30名ほど含めて200名ほど参加して盛大でした。従来、現地では外国人は自由には動けないのですが(戦前の日本をイメージしてください)今回の集会を経験して、変化を感じました。



NGO meeting

5、小規模工業展での一村一品運動展示

2011年6月30日-7月1日
ミャンマーの首都ネピトで表題の展示会が開催され、一村一品運動の代表例としてカウンターパートのAMC社が紹介され作品が展示されました。大統領の施政方針でも触れられている国の発展のための産業育成の具体化として国内産業の開発支援を表に出しています。

自分達で出来る事を実行しようとする姿勢が強く感じられます。タイのOTOP(一村一品運動)と比較するとかなり遅れて、まだまだ動きはざこちないのですが、自分達で開始した事に大きな変化と感じました。



副大統領も視察